

### 大東ふるさとカルタに見る地域遺産②

### 「ふるさとの おもかげ残す 三枚板」

津之辺、住道、観音井路いじ。さて、この共通点は何でしょうか。

これらは、江戸時代に舟運しゅううんでにぎわった浜のあった場所です。かつては住道浜、津之辺浜などと呼ばれていたため、今でも「浜」という字名をご存じの人もいるでしょう。これらの浜は、大坂とこの地を結ぶ物流の拠点となっていました。

ところが、宝永元年（1704）に大和川が付け替えられると、深野池は新田へと姿を変えていきます。それまで池や



鴻池樋門（手前から四十荷船、剣先船、奥が三枚板船）

川であった場所が陸地になり、かつては浜として

栄えた場所の中にも、水

上交通の廢れていく場所が出てきました。次第に、寝屋川と恩智川沿いの住道浜や諸福浜が中心となって栄え、さまざまな荷物を積んだ、多様な船が行き交うようになります。

その中の「三枚板船さんまいばんせん」に注目してみま

しょう。三枚板船は、農家の自家用の田舟であり、農作物の他に「肥たこえ」の運搬に用いました。三枚板船は慣れば1人、普通は2人が乗り込みます。しかし、鴻池にはかんがい用のせきがあり、6月1日から9月30日まではせきを止めていました。そのため、写真のように、せきの横にある坂から舟を陸にあげて、4〜5人で押し上げて越えたようです。

寝屋川舟運の末期に、その中心となるのは「し尿」の運搬でした。三十荷船か、四十荷船という専門業者の船と、三枚板により「し尿」が運ばれていました。「小便」は花卉かきの栽培のため生駒山麓方面へ、「大便」は稲田の肥やしとして用いられたといえます。

